

後藤末雄

私が子供の頃には、洋菓子と言えば、風月堂のカステラぐらいであった。近ごろは洋菓子がはやっているので、大分、洋菓子を嗜むようになった。先日、頂戴したコロンバンの「バリジェヌ」は風味が細やかで、舌触りがよく、ほんとうにおいしかった。

和菓子には古典的な名前がついていて、仲々、風流である。鶯、桜餅、柏餅、磯松風、桃山、三笠山、天の川、露のしづく……それに柏餅も桜餅も木の葉に包んである。西洋で、こんなことをしたら、非衛生的だと言って、喰べる人もあるまい。菓子屋の名にしても、青柳、青木堂……

青木堂というのは、本郷三丁目にあった洋酒店兼洋菓子屋で、二階は喫茶部になっていた。

この店ではコーヒーとシュークリームのうちまいのが評判であった。私は講義が終ると、此の店にかけつけて、汚い木造階段を昇っていった。「やあ」と言って、見知り顔とアイサツを交換した。

常連の中に石川という先輩がいた。彼は法学生で、文科生ではない。しかし仲々の文学通で、「明星」の誌友であった。そして石川石村という妙に堅苦しい文名で、詩や和歌を発表していた。実家は青山に住んでいる金持で、私は幾度も招かれて御馳走になったこともある。石川は細面の長身、フチなし眼鏡をかけていた。当時こういう眼鏡はハイカラ紳士の用いるもので、学生の分際などで掛けるものではない。それに彼は口のきき方も甘ったるく、字義通り、キャンディ・ボーイであった。

或る日、青木堂へ行ってみると、石川は洒落れた和服をきていた。無論、袴はつけていない。聞けば青木堂に和服を預けて置いて、ここで制服を和服に着替え、これから新橋へ遊び出かけるのだそりである。

「それじゃ、あした朝、待合から、ここへ帰ってきて、制服と着替え



